〔論　文〕

シャカの神格化について（六）

――大乗佛教・大般涅槃経㈢――

小畑　進

六、大乗佛教・大般涅槃経〈三〉
序　大般涅槃経と佛身論　……　前号
(1)　無常垂示の思想　……　前号
(2)　常楽我浄の思想　……　194
i　如来常住無有変易から　……　194
ii　涅槃三徳の秘密蔵から　……　195
iii　伊字三点の如く　……　196
iv　四顚倒を顚倒して　……　197
v　客医乳薬の譬喩　……　198
vi　解脱清浄の色を　……　200

vii　三病三薬の譬喩　……201
viii　非想非非想處を断じ　……201
ix　涅槃と大涅槃の別　……202

(2)　常楽我浄の思想

i　如来常住無有変易から

シャカの神格化を期して拡大する佛身論議が、それにともなって佛教々理を変貌させて行くのは当然のこと。従来、「諸行無常」（あらゆる現象はうつり変る）、「諸法無我」（すべてのものには不変の実体はない）、「一切皆苦」（この世で苦でないものはない）を〈法印〉として掲げ、世間で無常、無我、苦、不浄の現実を常・楽・我・浄ととらえる執着は誤謬なり、その常顚倒・楽顚倒・浄顚倒・我顚倒を〈四顚倒〉として来ていた。身はこれ不浄（身念處）、受はこれ苦（受念處）、心は無常（心念處）、法は無我（法念處）と、不浄、苦、無常、無我の〈四念處〉を観法することが正義である、と。そして、常・楽・我・浄の見解を打破する、というのが従来の立場であった。

それが、今、『大般涅槃経』は、佛身常住不滅の旗幟をひるがえして、〈常〉を認める。となれば、常なる〈我〉をゆるすことになる。佛性は真我とも大我ともなって。さらには〈常〉にして〈我〉を所有することは不浄どころか〈浄〉も浄、大浄であり、そこに住する境地は苦どころか〈楽〉も楽、大楽となる。こうして、シャカの常住を宣揚した『大般涅槃経』は、従来の立場を全く変革して、常・楽・我・浄を強調することに

相なる！

ii　涅槃三徳の秘密蔵から

――今、本経の哀歎品第三を見るに、純陀がシャカに供物をささげて暫く、大地震動して、大衆は身毛皆竪し、声を揃えてシャカに延命を願う。「今、佛の涅槃を聞き、我等の心迷乱す。かの大地動に諸方を迷失するが如し。大仙涅槃に入り、佛日地に堕ち、法水悉く枯涸す。我等定めてまさに死すべし。」と哀歎し、「唯願はくば久住して、涅槃に入りたまはざれ。」と。

これをいましめてシャカ曰く。

諸の比丘、佛の出世は難し。人身得難く、佛に値うて信を生ずる。是の事も亦難し。……汝等我に遇ひて空しく過ぐべからず。汝、今、是の佛法の宝蔵に遇ふ。是の虚偽の物を取るべからず。」（大正蔵一二・六一六ａ）

として。弟子等が、なお大乗に暗く、鬚髪を剪りながらも、煩悩のしがらみを除いていないことから、涅槃に入る前に甘露を教勅すべし、として、〈涅槃三徳〉の秘密蔵をうち明けることになる。

我れ今、まさに一切衆生及び我が諸子、四部（出家二衆、在家二衆）の衆をして悉く皆秘密蔵の中に安住せしむべし。我も亦復まさに是の中に安住して涅槃に入るべし。（同）

と。かくして、涅槃といっても、従来考えられている涅槃ではなく、〈大涅槃〉ともいうべきものを、三徳から説き出すのである。

何等をか名けて秘密の蔵と爲す。猶し伊字（ぃ）の三点の如し。若し竝べば即ち伊を成さず、縦も亦成さず。摩醯首羅（大自在天）の面上の三目の如くにして、すなわち伊を成すことを得。三点若し別なる

も亦成すことを得ず。我も亦是の如し。

解脱の法も亦涅槃に非ず。如来の身も亦涅槃に非ず。摩訶般若も亦涅槃に非ず。三法異なるも亦涅槃に非ず。我れ今かくの如きの三法に安住して、衆生の爲の故に涅槃に入るを名づく。世の伊字の如し。（哀歎品第三、大正蔵一二・六一六ａ）

ⅲ　伊字三点の如く

今、これを横超慧日の一文を借りて解説すると次のごとくになる。

「涅槃経に従えば、大涅槃は法身・般若・解脱の三法をもって成り立つものであり、これを涅槃の三徳という。時と處との制約を越えて普遍常存する宇宙の真実の理法が法身であり、それをさとる智慧が般若であり、それをさとった時に得られる自由な境地が解脱である。

この三者は相互に相依り相待って初めて三法それぞれの意義を全うするもので、互いに孤立しては成り立つものではない。理が先にあってのちに智がさとるのではなく、智がさとったのちに自由がおこるのでもない。三者は不離にして同時なるものである。故に法身・般若・解脱の三者はその何れの一をとってみても、その中に他の二者が必ず含まれているべき筈のもので相互の関係は並列であるとも連続であるともいうことは出来ない。

涅槃経は、この意味を涅槃の三徳が不縦不横なること梵語伊（ः）の三点の如く大自在天の面上における三目の如くなりと喩えている。（『涅槃経と浄土経』平楽寺書店、昭和五〇年、一四五頁）

〈般若〉、〈解脱〉が常住なる如く、如来の本質も有爲無常な肉身を離れた常住の境地であるのはもち論で、大涅槃では、〈法身〉・〈般若〉・〈解脱〉の三徳が不縦不横、不竝不別、相即円具であると説くわけである。

iv　四顚倒を顚倒して

とにかく、入滅を機として、シャカは無常なる肉身を捨て、純粋の本佛・法身として〈常住〉する。苦なる人生から脱して〈安楽〉、無知無明を解いて〈大我〉、煩悩の穢れを去って〈清浄〉の境地を開く、と。従来、無常・苦・無我・不浄と見たてて来た人生は、常・楽・我・浄の景観に転換することになる。

我とは即ち是佛の義、常とは是法身の義、楽とは是れ涅槃の義、浄とは是れ法の義なり。（哀歎品第三・大正蔵一二・六一七a）

そして、佛教的世界は一変する。

無我とは即ち生死、我とは即ち如来、無常とは声聞、縁覚（小乗）、常とは如来法身、苦とは一切外道、楽とは即ちこれ涅槃、不浄とは即ち有爲法（現象界）、浄とは諸佛菩薩の所有の正法なり。これを不顚倒と名づく。もし四顚倒を遠離せんと欲せば、是の如きの常、楽、我、浄を知るべし。（大正蔵一二・六一七b）

となって従来の徒は仰天する。

汝等がこれまで修習している無常や苦の思想は真実なものではないと断じ、真実でないものを真実と思いつづけて固執するのは、あたかも水中に落ちた瑠璃の玉を探し求めては、瓦礫や木草を捉えて瑠璃の珠を得たと歓んでいるのと同じであると断じて啓蒙する。

汝等、比丘、是の如く無常、苦、無我想、不浄想等を修習して、以て実義と爲すこと、彼の諸人の各々瓦石、草木、砂礫を以て宝珠と爲すが如くなるべからず。汝等、まさに善く方便を学びて在在處處に常に我想、常楽浄想を修すべし。また、まさに先より修習する所の四法の相貌、悉く是れ顚倒と知り、真

実に諸想を修することを得んと欲せん者、彼の智人の、巧に宝珠を出すが如くすべし。所謂、我想、常楽浄想なり。（大正蔵一二・六一七ｃ）

と明言する。

いわば顚倒の顚倒ともいうべき大変換であって、聴く者たちは即應することが出来ない。そこで、「シャカは先きの所説と矛盾しているではないか。」との疑義が呈せられる。

世尊、彼先に諸法無我なり、汝まさに修学すべし。是を修学し已らば、則ち我想を離る。我想を離るれば、則ち憍慢を離る。憍慢を離るれば、涅槃に入ることを得と説たまふが如き、是の義如何。（同）

と。

たしかに、我執を離れよとか、諸法は無我なりといった今までの所説は、どうなるのか……。なんと今は「在在處處に常に我想を修すべし。」などと……。全然矛盾ではないか、と。

v　客医乳薬の譬喩

さて、この難所・切所を『大般涅槃経』の作者グループはどう越えるか。――これが本経の眼晴である。そこで巧みに語り出されたのが〈客医乳薬〉の譬喩であった。

ある国王の凡医は何でもかんでも〈乳薬〉一辺倒でことをすませていた。そこへ、病理・薬理に通暁した名医が遠方より来たり、凡医に師事すること四十八年。一日、伴われて王にまみえるや、治国、治病の法を説いた。それを聞いて、王は初めて旧医が凡医なることを知り、これを放逐した。

新たに侍医とされた客医は、今後はあの旧医が一辺倒だった〈乳薬〉を厳禁する宣令を国王に出させる。乳薬を薬となす者あらば、その首を斬るべし、と。

ところで、間もなく国王が病いを得た。すると、なんとこの新たな侍医は、さきに厳禁させた〈乳薬〉を勧めるではないか。国王は、「汝、今狂するか。汝先に毒と言ふ。今云何ぞ服せしむ。我を欺かんと欲するか。先医の讃ずる所を、汝先に毒と言ひ、我をして駆遷せしめ、今復好にして、最も能く病を除くと言ふ。」と怒る。

しかし、新医は答える。「旧医はその適否を弁せず、万病に対して乳薬一本槍であった。僥倖に適剤となることもあったが。元来、乳薬には毒薬と甘露がある。特別に飼育された牛より得た乳薬でなければ。」と。

ちょうど、先きには無常、無我、皆苦と説き、今は常、我、楽などと説くのも同じである。外道が真実の〈我〉を知らずに説くゆえ、〈無我〉と説いてこれを喝破したのだ。だが、衆生の機が熟するのを見ては真の〈我〉を説いたのだ、と（大正蔵一二・六一七c～六一八a）。

「先に無我として否定せられた我と、今我として肯定せられる我とはその本質全く異ることを注意すべきであって、先には我を個体的に、もしくは実在的に考へられてゐたからかかるものを否定する意味で無我と説いたのであるが、今我といふのは我なる実体が存在すといふのでなく、法性が真実にして常住であり、自ら主となって他の所依となり、それ自身の性が不変なることを我と名けたのに外ならぬ。即ち我は厭くまでも力用属性であって個的存在ではないのである。

かくして涅槃経は無我と我とを撞着せしめることなく、能く小乗の教義を大乗への方便として包容してしまったのである。（横超慧日『涅槃経』平楽寺書店、一九八二年、一〇一、二頁）

まさに、従来まで旗印とされて来た諸行無常・諸法無我・一切皆苦の法印は、あらたに染めかえられなければならないことになる。

vi　解脱清浄の色を

憍陳如品第二十五には同様のことが語られる。鹿野苑以来の五弟子の一人、憍陳如（Ajñata-kaundinya）に説いて曰く、〈色〉（形あるもの）は無常である。この色を滅することによって、解脱常住の色は得られる。この色という要素（蘊）のみか、色を感ずる〈受〉、それを表象する〈想〉、意志する〈行〉、認識する〈識〉にいたるまで、こうした存在の把握の仕方はみな無常である。これを滅することによってこそ、解脱常住の識を得ることができる、と説く。

色は是無常なり。是の色を滅するに因って解脱常住の色を獲得す。受想行識も亦是無常なり。この識を滅するに因りて解脱常住の識を獲得す。色は即ち是れ苦なり……色は即ち是空なり……色は是無我なり……色は不浄なり、是の色を滅するに因りて解脱清浄の色を獲得す。受、想、行、識も亦復かくの如し。（大正蔵一二・八三八b）

以下、生老病死、無明、顚倒などが取りあげられて、これらを滅する時に、初めて安、楽、我、浄の境地を得る、と説く。そして、このように知る者こそ沙門、婆羅門と称してよい。佛法を離れては、本当の沙門、婆羅門のあるはずがなく、一切の外道は虚偽である、と獅子吼した。

これを耳にした外道たちは、シャカを狂人呼ばわりする。シャカは矛盾している、と非難する。

沙門瞿曇（シャカ）先に出家し、已りて無常、苦、空、無我、不浄と説き、……今者、瞿曇此の婆羅林に来至して、諸の大衆の爲に常、楽、我、浄の法有りと説く。（大正蔵一二・八三九a）

と反駁して、摩伽陀国王・阿闍世に、シャカとの討論を申し出た。闍提首那という婆羅門が立って詰問する。「もし、煩悩を除去するのを涅槃と名づけるならば、涅槃はすなわち無である。もし無ならば、なぜ常、楽、

我、浄ありというや。」と。

vii　三病三薬の譬喩

ここに説き出されるのが、〈三病三薬〉の妙答であった。――たとえば、三種の病は三種の薬で治る。熱病は酥(す)で治し、風病は油で治し、冷病は蜜で治す。この三種の薬は、よく治力を有する。その理由は、風の中に油無く、油の中に風は無い。同じように蜜の中に冷無く、冷の中に蜜は無い。無いから能く治すのではないか。一切衆生においても同じことだ、として、

一切衆生も亦復是の如し、三種の病有り。一には貪、二には瞋、三には痴なり。是の如きの三病に三種の薬有り。不浄観は能く貪薬となり、慈心観は能く瞋薬となり、観因縁智は能く痴薬となる。善男子、貪を除くが爲の故に非貪観をなし、瞋を除くが爲の故に非瞋観をなし、痴を除くが爲の故に非痴観をなす。

三種の病の中に三種の薬無く、三種の薬の中に三種の病無し。善男子、三種の病の中に三薬無きが故に。無常、無我、無楽、無浄なり。三種の薬味の中に三種の病無し。是の故に常、楽、我、浄と称することを得。（大正蔵一二・八四一ｂｃ）

と、婆羅門の詰問を打破する。以下、迦葉氏、富那、清浄浮、積子梵志、納衣梵志、弘廣婆羅門等の外道は、次々にシャカに説得されて開眼されて行くことになる。

viii　非想非非想處を断じて

このあとは須跋陀との問答でしめくくられる。須跋陀は百二十歳の老婆羅門の自信家で、自分は先きに欲

はこれ無常、無楽、無浄と思惟し、色は即ちこれ常、楽、清浄と観じた。次にこの色は無常であって、癰の如く、瘡の如く、毒の如く、箭の如しと観じて、無色、常、清浄、寂静を観じた。

次にまたこの想を観じて、この想もこれ無常、癰、病、毒、箭であると観じた。かくて想に非ず、非想に非ずという境地を体得した。この非想非非想こそは一切智、寂静、清浄である。堕墜有ること無く、常恒不変。ゆえに我輩は能く心を調伏せり、と宣した。

この須跋陀の高言に対してシャカは一刀両断。汝が獲得しえたという非想非非想なるものも、なお一つの想ではないか。しかるに涅槃は無想である、と。なのに、どうして汝は涅槃を得たといえようぞ。汝がいう非想非非想處は、なお想であり、それも、それこそ癰の如く、瘡の如く、毒の如く、箭の如し。かくの如き非想非非想處を断ずること能わずして、涅槃を獲得したといえるものか、と。

善男子、一切諸法は皆是處仮なり。其の滅する處に隨ひて是を名けて実を爲す。是を実相と名け、是を法界と名け、畢竟智と名け、第一義諦と名け、第一義空と名く。（大正蔵一二・八五二a）

でしめくくられる。

ix　涅槃と大涅槃の別

この項を終るにあたって、第二十一巻の品名となる光明遍照高貴徳王菩薩も種々鋭い質問を試みるが、中でも〈涅槃〉と〈大涅槃〉の別が論ぜられるところがあり、その一節を見ておこう。

たとえば、飢えた人が食を得るのを安楽とし、涅槃といったりする。また、病人が癒ゆることや貧窮者が宝を獲ること、人骨を観じて貪欲を抑えることを安楽といったり、涅槃といったりするが、これはたとえ

〈涅槃〉であっても〈大涅槃〉ではない。

また、小乗の徒が聖道によって煩悩を止めるのも安楽であるし、〈涅槃〉といわれようが、そこにはなお煩悩の余薫が残るから、〈大涅槃〉とはいえない。常・楽・我・浄が顕われてこそ初めて〈大涅槃〉といわれるのである。大我、大楽、大浄あってこそ、と。（大正蔵一二・七四六c）

＊大我＝その身形自在。無礙自在。軽重自在。住所自在。所持自在。演説自在。偏満自在と、一切の束縛を離れた無礙なる我（八自在我）。

大楽＝四種の真楽で、相対的悦楽を捨てる楽。喧騒と静寂を離れた楽、真実相洞見の楽。不壊常住の身を得る楽。

大浄＝世間（二十五迷界）の浄化。行爲の浄化（業清浄）、肉体の浄化（身清浄）、精神の浄化（心清浄）。

ともかくも、佛身常住を弁証せんがために、涅槃常楽我浄が蜿蜒續々と語り上げられるわけで、佛身論議がいかに佛教々理を展開せしむるものであるかを思い知る次第である。

以上、従来外道説のように考えられていた常・楽・我・浄説は、いったん、無常、苦、無我、不浄の空の観念をへたのちに、真実の常・楽・我・浄が出現するといわれるが、そこに突き抜けた真空妙有の世界、いうところの〈大涅槃〉の境地として、思いあたるのは、『ハイデルベルク信仰問答』の一節であろう。それこそ、無常・苦・無我・不浄の人生を脱けて、まこと常・楽・我・浄の世界を生きる！それも、〈空の観念〉をへてでなく、〈救主イエス・キリストのペルソナ〉と一体となり、「聖霊」によってのこと！「生死の唯一の慰めは」と問うて、

「身体と霊魂とをもつ私が、生きるにも死ぬにも、私のものでなく、私が信頼する救主イエス・キリストのものであるということである。イエス・キリストはその貴い血をもって、私のすべての罪のために完全に償い、悪魔のすべての力から私を救い出し拾う。このように天にいます私の父の御旨がなければ一本の髪の毛も私の頭から落ちることはなく、実にすべてのことが必ず私の祝福に役立つように私を守り給う。それゆえにまた、イエス・キリストはその聖霊によって、永遠の生命を私に保證し、今からのち彼のために生きることを心からの喜びとし、かつその用意をさせ給う。」

と！

（つづく）